『平成19年度海外研修派遣報告について』

東京慈恵会医科大学附属病院　放射線部　北川　久

1.　期待していた事とその結果

第1回目に参加された方のレポートを拝見し、その充実した研修内容および共同生活に共感を受け是非参加したいと思った。そして念願の派遣委員として選出され、この研修に期待していた内容とその結果を述べたいと思う。①スタンフォード大学独自に考案した研修プログラムの講義内容への期待②医療事情の違いが及ぼすさまざま影響（医療費の違い、日本の放射線技師との違い）についての講義内容への期待③スタンフォード大学におけるMRIやCT、また分子イメージングやPET・核医学、また治療分野においての最新医療技術・研究の講義内容への期待④各モダリティの専門知識を持つ技師との交流で、自分に無い知識を確認したいという期待、などを抱き参加をした。結果として①においては全体的に通して、“1時間”と決められた時間内で、同時通訳を入れながら正確に講義が終了し、さらに質疑応答時間も設けた中ですべてのプログラムが終了するところには感心・感動をおぼえた。また、プレゼンが上手である。グラフの使い方や巧みな動画プレゼン、効果的なエフェクト、文字の大きさ、何を伝えたいのかが明瞭かつ簡潔に述べており非常に参考になった。②については後で述べる“診療放射線技師から見た日本とアメリカとの違い”を参照して欲しい。③非常にレベルの高い研究が行われている事が分かった（因みにMRにおいては現在200もの研究内容を抱えているそうである）。④については、さまざまな分野の先生方とお話をしていくうちに、自分にない知識はこれほど存在するのかと改めて痛感しました。例えば、画像処理の基礎知識、核医学・CTの奥深さ、また自分の英会話能力の低さを認識しました。今後の技師人生の設計プランに盛り込み、さらにMR研究に付加できれば良いと考えている。

2. 診療放射線技師から見た日本とアメリカとの違い

まず、医療費の違いが及ぼす影響は計り知れないほど大きいものであると考える。1回の診療にかかる医療費は保険内容にも変わるが、日本ではありえない高金額である。つまり、所得の少ない人間は高度な医療を受けるのが困難である。また、診療放射線技師においても、国で認められたライセンス所有によって大きく所得が違ってくる。そのためには多くの認定試験や講習を定期的に受講し常にモチベーションを維持しているそうである。また、診療放射線技師のルーチン業務もモダリティごとに細分化・マニュアル化が徹底されている。そのマニュアル以外の仕事を行わないそうである。国によって医療への考え方が違うと、これほどまでに大きな差を生んでしまうとは・・・、と痛感した。

3. 最も印象に残ったこと（セミナーとイベント）

- セミナー：最も印象に残ったのはMR技師のAnneさんならびにTeresaさんの『The Tech Experisen：American Perspective』の講義であった。アメリカの技師の現状について熱く講義していただき共感し、また日本との違いを確認することができた。実はすべての講義が印象に残っており、優劣を付けるのが難しいぐらい洗練された内容であった。
- イベント

サンフランシスコジャイアンツのメジャーリーグ観戦は良かった。バリーボンズのホームランこそ見る事ができなかったが非常にエキサイトした。また、プログラムにはなかったが毎晩、次の日の研修内容に即して、専門の先生方（高橋（順）先生、山口先生、内田先生、大西先生）の予習講義をビール片手に拝聴できるのはこの会だけであると思う。

4. 海外研修のありかたについて

研修・講義中は同時通訳の方がいて、何不自由なく講義・質疑応答を受ける事ができた。英会話をあまり得意としない自分としては非常に良い環境で講義が受けられた。ただ全く英会話ができないで参加してしまうとエキサイテイングな研修にならないので日常英会話はできるほうがBestであると思う。またスタンフォード大学病院内の研修においては現場の技師さんとの交流が少なかったので研修時間をもう少し長く設定して欲しいと期待する。また、IVR部門や一般撮影部門なども研修プログラムも組みこんで欲しいと期待する。

最後に1週間の研修を許していただいた東京慈恵会医科大学附属病院放射線部矢本技師長を始めとする放射線技師諸兄、この研修の運営・企画のために尽力いただいた多くの先生方、事務局の方、現地のスタッフの方に感謝いたします。

5. お気に入りの写真

・3Dラボセンターにおいて、さまざまなワークステーションツールを使いこなしプロトコルの管理・開発をしているMarc Sofilos氏。3Dラボセンターはスタンフォード大学内に2ヶ所あり、その1つのClark centerで撮影。